寄　書

『わたしの日韓関係史』（上）

"My Relationship to Japan and Korea", No 1

木屋　隆安*

1．わが隣人の対日感情

『自由圏大ハイウェイ』構想の第一関門『日韓トンネル』建設の本格的な試掘調査が始まった．昨夏，済州島で開かれた教授招聘勝共学術セミナーに参加した時聞いた話だが，対馬（つしま）南端の試掘ボーリングで探層筒の中にたくさんの砂利が詰まっていたそうだ．砂利は起伏のある陸地の河川床の岩石が水の流れで角がとれたもの．中生層のころ大陸（半島）と日本とは地続きであったことを物語る．

私はこの話を聞いて深い感動を覚えた．日ごろの持論『日韓両民族こそ同文同種』であることを地質学の面からも立証されたと思ったのである．私は昔から「なぜ日本人と韓国人は角を突き合わさねばならぬのか」といつも首をかしげていた．お互いの心が溶け合うには時間はかかろうが，「これだけはどんなことがあってもやってのけなければ」と，いつしか心に誓うようになった．そういう意味で『日韓トンネル』ができあがれば，急速に両国の〝心のわだかまり〟は解消されるに違いないと思った．

女優の月丘夢路さんがホテルニューオータニの総会の席上で，「私の名は夢路．日韓トンネルにふさわしい名前だと思います．このトンネルを夢路に終わらせないで，ぜひ完成させてほしい」と挨拶したのを覚えているが，全く同感だった．〈あのトンネルさえ実現すれば地続きの時代に二つの民族は還ることができる……〉とさえ思った．

実は月丘雪路さんと私は同郷である．というより亡母の実家が広島の上流川にあった関係で，私は小・中学校を広島高師の付属にかよった．月丘さんのお家は付属小学校の正前の真ん前にある大きな薬局だった．あのひとが宝塚に入ったあともお父さんを脅してピクリン酸を手に入れ，黄色火薬を作って大爆発をやらかし，停学3日の処分を受けたことがある．月丘さんは県女のころからすごい美人で，男子中学生の〝あこがれの的〟だった．

その中学の先輩に，先年亡くなった元駐韓公使・元フィンランド大使の上川洋さんがいた．不思議とかわいがってもらい，心臓を悪くして外務省を辞め，国会図書館専門委員になったころ，よく遊びに行っていた．図書館発行のクォリティ・マガジン『レファレンス』に先輩が『日韓信頼感の回復を求めて』という論文を書いていた．確かもう7年も前のことである．

私はその論文を読んで大きなショックを受けた．とくに第二章『日韓の意識調査とその分析』が，ショックの震源地だった．先輩は1959年秋，朴（パク）大統領が暗殺される1カ月前に，ソウルの明知大学（総長兪尚根博士）から招待を受け，10年ぶ

* ㈱中外ニュース社専務取締役，主筆

りに訪韓した機会に，同大学の政経学部最高学年生250人の意識調査アンケートを行った．その結果が次のように報告されていたのだ．

①日本はソ連より嫌いな国，北朝鮮よりは少しマシな国として〝嫌いな国〟のビッグ・2にランクされていたこと，

②両国が完全な友好関係になるには50～100年かかると答えた人が35％（30年かかるが第1位で40％を占めていた）もいた――．

上川先輩はこのアンケート調査の結果を踏まえてさらに次のように嘆いていた．

――目に見える外見上の繁栄や発展はさておき，日韓両民族の精神的な信頼感は，この10年間に，それに見合うほど育ったであろうか．日韓相互の蔑視や嫌悪感は，歴史的に極めて根の深いものがあるが，信頼を回復するために，この10年間の人的交流が果たしてどれほど役立ったであろうか．

――意識調査の結果をまとめて驚いたことは，韓国人の対日感情は10年前と全くかわりなく，猜疑心，警戒心，復讐心等，いわゆる特殊感情が，そのまま残っているということであった．そして日韓民族をへだてている感情の落差の根が，いかに深いものであるかということを，いまさらのごとく痛感させられたのであった．

――アジアのこの地域で，長く平和と安定がもたらされるためには，両民族の間にほんとうの信頼感が育っていくことが大切であることはいうまでもない．日韓が精神的に十分うちとけて信頼していける日は，果たして何十年先に来るのであろうか．あるいは，不信感を心の底に秘めたまま，再び1000年の歴史をくり返すのであろうか．本稿は，民族融和の日が，将来，必ずやってくることを確信して，またそれにわずかでも役立つことを念願しながら書いた――と．

この論文は，27年前の春に書かれたもの．そんなにも年月がたっているのに，韓国の人たちの意識は現在にいたるも〝化石〟のように固まったままだ．今でも通用する韓国人の対日意識である．なぜわが隣人は今なお私たちに心の窓を開いてくれないのだろう……．私と韓国人とのおつき合いはかなり長い．はや半世紀に近い．『日韓トンネル』の完工を千秋の思いで待ちながら，こしかたの私の日韓関係史をつづってみることにする．

2．特高と韓国人慶大生

1943年3月といえば，もう44年も昔のことだ．当時大学2年生だった私は，治安維持法違反容疑で警視庁・特高につかまり2カ月の検事拘留をくらった．思想的にアカかったわけではないが，日本皇室の“万世一系”説に学問上の疑問を抱き，そのことをある学術研究サークルで発表したら，さっそく特高のイヌが〝危険思想の持ち主〟として警察にご注進したのだ．

毎日，朝早くから暗くなるまで顔が変形するくらい緩いギザギザのついた赤いゴム製の棒でたたきのめされ，目はつぶれ，唇ははれ上がり，すさまじい拷問が続いた．要するに「共産主義者だからわが万世一系の御皇室の〝存在〟にケチをつけたのだろう！」というのである．私は共産主義者ではないから，いくら殴られても「ハイ，そうです」とウソの自供はできない．

こんな取り調べが繰り返されているうち，1カ月が過ぎた．そのころ気づいたのだが，私と同じように特高にいじめられている慶応大学の学生がいた．彼の場合，「半島人のクセして日本女性をだまして性交渉をもった」というのが拘置の理由だった．刑事に「それがなぜいけないのですか？」と尋ねたら，せっかく拷問が少なくなっていたのに「この野郎，あいつとグルか！」で，またゴム棒のリンチが始まった．

この慶大生は，当時日比谷交差点の一隅にあった〝美松（みまつ）〟という高級音楽喫茶のウェイトレスだったかわいい女の子と恋愛をして同棲（せい）したらしい．それがいけないというのだ．私にはどうしてもその〝いけない理由〟がわからなかった．しかし聞けばまたゴム棒のシゴキを受けるから黙っていた．

私は5月の末に釈放された．母親の遠類に当たる当時の文相橋田邦彦さんと母親が〝もらい受け人〟だった．戦争はますます激しくなり，その年の11月に学徒動員で福岡の歩兵24連隊に入隊することが決まった．「どうせ兵隊にとられれば死ぬ」という諦（てい）観があったので，入隊までのわずかな期間を内地の家をそのままにして物資の豊かな旧満州の鞍山に住みついた父母や弟妹（きょうだい）の所で過ごすことにした．内地の家は広島の東白島だったから，

もし満州に行かなければわが家は全滅していたろう……．

鞍山と奉天（現瀋陽）の間に古都遼陽があるが，そこで考古学の世界的権威鳥居竜蔵博士父娘（おやこ）が古墳の発掘をしていたので，それを手伝うことを名目に渡満した．汽車が京城（ソウル）に着くころ，私は用をたしてデッキに出た．そこにどこかで見たことのある学生がもの思いに沈んで立っていた．〈だれだったろう？〉と盛んに考えたが，どうしても思い出せない．とうとう声をかけた．

「君，どこかでお見かけしたと思うんですが，ご記憶ありませんか」

学生は私の顔をじーっと見ていたが，やがて頭を左右に振った．知らないというのだ．ペンがクロスしている記章をつけた丸帽をかぶっている．私はハッとした．あの取調室で一緒に拷問を受けた慶大生だった．

「君はあの時の……」

といったら，彼は私より先に思い出していたらしい．にらみつけるように，いった．

「私は君を知りません．しかしいっておきますが，私は慶応を退学させられました．だから今，故郷（ふるさと）の京城に帰るところです」

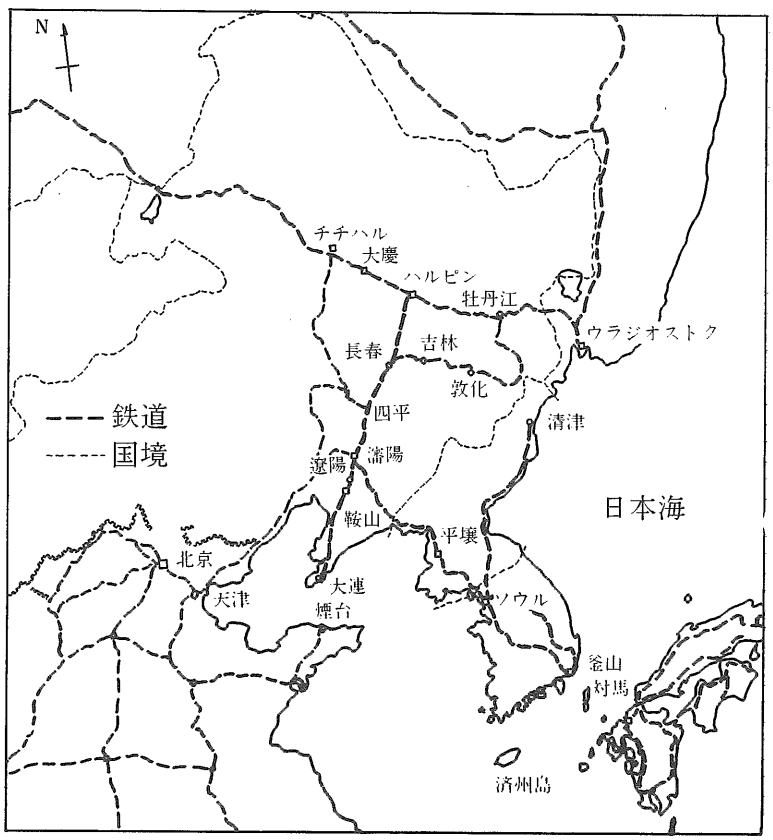
「なんでまた退学など……」

「君の国の特高が大学当局に圧力をかけたのでしょう．この際はっきりいっておきますが，君は日本人，私は朝鮮人……，韓国人です．君とは人種・民族が違うんです．だから日本人の女性とは結婚できないのです．でももうそんなことはどうでもいい，すべては思い出したくない過去のことです．君もです」

こういって，彼は黙りこくってしまった．やがて汽車は京城駅に着いた．彼はトランクを持って降りて行った．そして後ろを振り向いて目礼をした．私は大きな声で，

「さようなら，お元気で！」

といった．彼は人ごみの中に消えた．もちろんそれ以来彼とは会っていない．10年前，戦後ソウルを初めて訪問した時，ゆくりなく彼のことを思い出したが，だれにもいわなかった．悲しい嫌（いや）な



思い出だったから…….

3．鞍山の徐さん

私は東洋史を専攻した．それも遼金史，いわば満州史である．鞍山に落ち着いたものの働かずに古墳発掘などしていたら，在満教務部，憲兵隊，特高が許さない．仕方がないので満州国通信社鞍山支局の嘱託になって市公署経済科の「本日の特別配給物資」の取材を専門に歩き回った．たまには市公署の斜め左にある協和会鞍山市本部にも顔を出した．

当時鞍山には20万人くらいの日本人がいたので，たたずまいはほとんど大連の街と同じで，話す言葉も日本語で用が足りた．私はいつの間にか富山(とみやま)さんという半島出身の協和会職員と仲がよくなった．なまじ内地人とつき合うと「あいつはアカだから気をつけろ」と，白い目で見られるのがオチだったから，自然と富山さんや中国の人たちと親しくなり，よく一緒にお酒を飲んだ．富山さんの家は鉄西のロータリーの一角に大きなお店を出している裕福なテーラーだった．

富山さんは酔いが回ると，きまって，

「僕はなぜ日本人に生まれてこなかったのか，それが情けなくてしようがないんだ」

とこぼした．そこで私はいったものだ．

「富山さん，あんたなぜそんなに日本人になりたいんです．僕は日本人を廃業したいので〝五族協和〟の満州国に来たのです．富山さん，あんたにちょっとお聞きしたいんですが，なぜあんたは富山という日本名を使ってるんです．先祖からの朝鮮姓をどうして隠すんです．なんというのですか朝鮮姓は？」

「それです．使いたくても使えんのです．ここはあんたのいうとおり建前は日・鮮・満・蒙・露の五族は平等です．でも実際は，あんた方日本人というか内地人がすごくいばっていますね．次はやはり3000万人の満人（中国人）です．僕ら朝鮮人は日本人でありながら，現実には内地人と差別をつけられ，むしろ満人以下の扱いを受けています．満人も僕らに対して〝見くだす〟態度をチラチラ見せています．だから富山という日本姓を使って日本人になり切ろうとしているんです．僕の本当の姓は徐といいます．しかし徐を使えばたちまち満人にバカにされます．それが悔しい…….僕はなぜ日本人に生まれてこなかったのだろう……，それが情けない」

こういって徐さんは泣き出すのだった．私は大きな声を出して彼をたしなめた．

「徐さん，あんたどうかしていませんか．あんたの祖国は日本じゃなく朝鮮なんですよ．古い時代には日本がお国からいろんな文物をもらったのを知っていますか？　壬申(じんしん)の乱という内戦が7世紀後半に起きていますが，あれは百済(くだら)系と新羅(しらぎ)系の帰化貴族の勢力争いと解釈するのが正しい．漢字だってお国の和仁(わに)博士から教わったんです．日本の神話時代に出雲(いずも)の国に大国主命という英雄がいましたが，あの人もお国の人です．僕の故郷は九州福岡ですが，私の血の半分以上はお国のものなんですよ．なにを好き好んで日本人になりたいというんです．つまらぬことです」

「でも日本人は僕たちの国を完全に支配しています．姓名も言葉も日本化して，この分では間違いなく朝鮮民族は自分たち固有のものを失ってしまいます」

「そんなことはない．徐さん，固有の文化は絶対守ってゆくんです．中南米やフィリピンのまねをしてはいけません．それにね，徐さん，こんなことは大きな声ではいえませんが，この戦争で日本は勝つと思いますか？　私は負けると思います．なんせ相手が米英ですからねえ……．やがてソ連も出てくるでしょう．そうなればお国は間違いなく日本から独立できます．それももう直ぐです．もうちょっとの辛抱です」

「あなた，そんなこといって……，非国民ですよ．聖戦を負けるなんて……」

「いくら勝ちたくても戦てないのです．そういう戦争に出てゆく僕の気持ちも察してくださいよ……」

「驚いた人だ，あなたは……」

といったきり，徐さんは黙って考え込んでしまった．

それから間もなく私は徐さんと別れ，福岡の連隊に入営した．3日後門司から輸送船で荒波の日本海を越え，朝鮮の清津から歩兵24連隊が永久駐屯している東寧・大城子へ連れて行かれた．同じ満州でも鞍山と東寧は遠く離れていた．一度徐さんから『満州第894部隊』あてに葉書をもらった

ことがあるが，二人のかかわりはそれっ切りになってしまった．それから2年もたたないうちに日本は負け，韓国は独立した．不幸なことに米ソなる大国のエゴの犠牲で半島には2つの国家ができてしまったが…….

徐さんが生きているかどうかはわからない．しかも光復後，あのいまわしい動乱が起きた．徐さんは確か『北』ではなく京畿道の出身だったと記憶している．

4．上官侮辱罪で銃殺寸前

1945年8月15日，日本は無条件降伏をした．日本ではどういうものかあの日を〝敗戦記念日〟とはいわず，〝終戦記念日〟と呼んでいる．韓国や中国では〝光復節〟，〝克日記念日〟，〝独立解放記念日〟といっている．私は日本人であり，とくに最後の関東軍予備士官学校生だったので，徹底抗戦した．15日の停戦を知らなかったので，9月28日まで継戦したのである．右手，左脚にかなりひどい銃創を負い，気がついたら吉林省敦化のソ連軍が接収した陸軍病院に収容されていた．幸い重傷ではなかったので間もなく退院して敦化の北郊沙河沿捕虜収容所へ入れられた．そして毎日のように敦化のパルプ工場の解体作業に駆り出された．

ソ連軍は恐ろしくガメツかった．当時満州にあった工場の機械や設備は一つ残らず貨車で自国領（シベリア）に持ち去った．畳や屋根のトタン板まで……．敦化のパルプ工場の解体もやはり自国に持ち去るためだった．私たちはそれを知っていたので，ソ連兵の監視の目を盗んではメーターなど計器類をハンマーでブチ壊して溜飲を下げていた．

秋も深まったころ，いつものように作業を終え，四，五十人の兵隊を引率して私は帰路についた．空腹と疲れでフラフラだった．街はずれまできた時，向こうからソ連兵ではない武装した一団がこちらにやってくる．服装や装備類は日本軍のものだったが，肩章はソ連軍と同じだった．私たちの保護と逃亡防止のためについていた年若いソ連兵に手マネ，足マネで，

「あれはなんだ？」

と尋ねたら，どうやら日本軍降伏と同時に現地で編成された〝解放軍〟らしい．私は初めて彼らを見たので物珍しさも手伝って，近づいてくるその一隊をしげしげと見た．そして驚いた．〝解放軍〟の指揮官が，なんと予備士官学校の時，私たちの教育区隊にいた徳山甲種幹部候補生ではないか．彼は朝鮮の出身だった．教育区隊長のS中尉は私を呼び出して，

「先任候補生（注＝私は11期だったが，成績が良くないうえ病弱だったので13期までズレ込んだ），わが区隊に半島出身の候補生がいる．名前は徳山という．そいつは優秀だからとくに選ばれて本校で将校教育を受けることになった．区隊生があいつをバカにしないように先任の貴様がよく面倒を見てやってくれ」

といって，急に小声になり，

「しかし油断するなよ．あいつはほんとうの日本人じゃないんだからな」

と注意した．私は徳山候補生に対しては区隊長からいわれるまでもなく，インフェリオリティ・コンプレックスを抱かせないようよく面倒をみた．それだけに彼が〝解放軍〟の指揮官になっているのを見て，懐かしさがこみあげてきた．それでスレ違う時，

「徳山候補生，よく無事だったな．頑張れよ」

と励ました．ところが彼は懐かしがるどころか，なにか大声で私をどなりだした．多分朝鮮語だったのではなかろうか．そして，いきなり軍刀のサヤごと，私をめった打ちにした．気がついたら私の顔はハチに刺されたようにはれあがり，眼もほとんど見えなかった．足腰が歩けぬくらいに痛んだ．下士官が私を助け起こし，彼の肩に寄りかかって歩いた．

その時彼が，

「あんたが徳山候補生といったあの人がいってましたがねえ，『こいつ，上官に向かって呼び捨てにするなど生意気なやつ！　だから気合いを入れてやるんだ！』ですって．彼は今，〝朝鮮人民解放軍〟の大尉だそうです．見習士官のあんたが彼の名を呼び捨てにしたのが上官侮辱罪なんですって．『本来なら銃殺ものだ！』ともいってましたよ」

といってくれたので，徳山候補生が怒ったすべての意味がわかった．私はただ彼に会えたのが懐かしく，うれしかっただけだったが，彼はそうは

とってくれなかったのだ．それにしてもあんなにメッタ打ちしなくてもよかろうにと，思わず悔し涙が出た．

その後，徳山大尉には会わなかった．会えばもちろん兵隊に歩調をとらせて敬礼するつもりだったが……．私は彼を恨まない．それほど彼は心の底で日本人を憎んでいたのだとしみじみ思ったから．

余談になるが，1945年11月中旬，私たちは「帰国する」ことを一つも疑わず，一個大隊1000人の大隊を編成して，関東軍予備士官学校の戦友702人が玉砕した牡丹江駅郊外の磨刀石付近から列車に乗り込んだ．

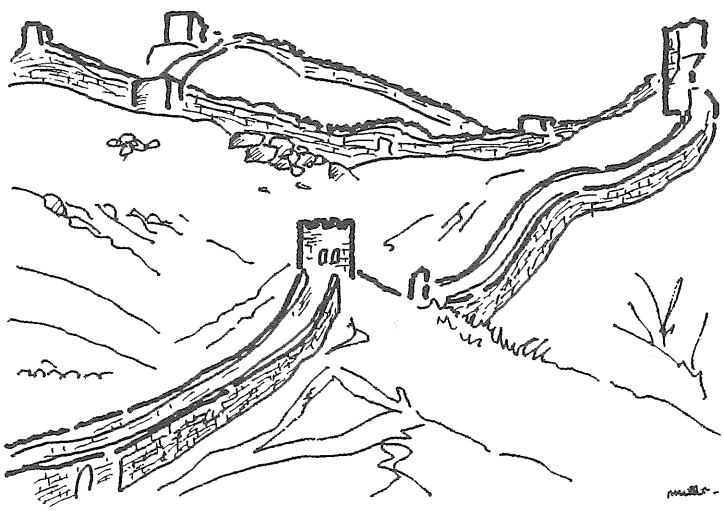
私は最後備のソ連警備兵の車両から前2両の食糧貯蔵車と炊事車の責任者として下士官2人，兵8人と一緒だった．炊事班長というのかも知れない．ちょうど日暮れ時，貨車が穆稜(ムーリン)に着いた．あの駅は八面通(パーメントン)ともいったと記憶するが……．そこで発車を待っていたら，例の人民解放軍約1個分隊がやってきた．徳山大尉殿がいるかも知れぬと思ってちょっと緊張したが，彼はいなかった．1人の将校が私のところへやってきて流ちょうな日本語で話しかけた．

「おい，曹長(私は略帽に階級章をつけていたが，座金は着けていなかったので下士官最高位の曹長と思われたらしい)，貴様はもう日本軍には十分尽くしてきた．今や日本帝国主義の手先から解放されて，自らの国の建国に取り組むんだ．そうだろう．さ，早く下車しろ．直ちに貴様を人民解放軍の中尉に任命する．さ，下車しろ！」

しまいのほうは命令口調だった．私は，

「自分は帝国陸軍兵科見習士官であります．せっかくのご要請でありますが，自分は日本の再建のため帰らせて頂きます．お国のご発展を祈ります」

といって敬礼したら，「バカもん，シベリアに重労働に行くのか．大バカもん」といって私をにらみつけた．その時初めて，〈あの男がいうようにわれわれはシベリアのどこかに連れて行かれるのかも知れない……〉というたとえようのない不安が脳裏をよぎった．

間もなく貨車は夜のとばりをつんざくような長い汽笛を鳴らしながら穆稜の駅を北東へ向けて走り出した．人民解放軍の姿はもうどこにも見えなかった．私たちは何も知らず重労働の待ち構えるシベリアへとひた走っていたのである……．

(続く)